

東博史大使からのメッセージ（大使館便り 157号より）

陽春の候、皆様におかれましては、御健勝にて、御活躍のことと存じます。今月号では、「リスボン国際観光フェアでの日本ブース出展」及び「ポルト市で開催された椿展」について、御紹介いたしたく存じます。

〔リスボン国際観光フェアに日本ブース出展〕

3月2日から6日の5日間、「リスボン国際観光フェア（BTL）2016」が開催され、日本政府観光局（JNTO）により日本ブースが出展されました。私も、初日に会場を訪れ、コスタ首相が日本ブース出展中の第3番館を訪問された際、私から、「本年は日本ブースを出展しております」と申し上げたのに対し、「承知しております」とのお返事があり、少し距離はありましたが、「日本ブース」をコスタ首相にも御覧いただくことができました。また、コスタ首相辞去の後、マヌエル・カルデラ・カブラル経済大臣及びアナ・メンデス・ゴディーニョ観光担当副大臣が2人おそろいで「日本ブース」に来訪下さり、浴衣を試着の上記念撮影に応じていただきました。その際、同経済大臣より、私に対し、「新政権下においても日本との観光交流の拡大、日本からの投資の拡大を期待している」旨の発言があったほか、ゴディーニョ観光担当副大臣は「日本ブースのデザインは素晴らしく、浴衣の試着は楽しい経験でした」と述べておられました。

また、BTLへの日本ブース出展にあわせ、3日の夜には、地方自治体、当地旅行代理店、航空会社、大学、プレス等の方々と、BTL日本側関係者の皆様をお招きし、私主催のレセプションを大使公邸で開催しました。同レセプションで、私は最近の二国間の関係進展の中で、両国間の観光客数は増大傾向にあり、今次日本ブース出展を契機として更にこの動きを推進して行きたいと考えている旨の挨拶を行いました。その後、今後の両国間の双方向の更なる交流活性化に向けて出席者の間で活発な意見交換が行われました。

同レセプションにおいて、京都の蒔絵師・下出祐太郎氏に、漆や蒔絵についてプレゼンテーションをしていただき、漆や蒔絵の歴史的背景や蒔絵の制作過程の説明、ポルトガルにも伝わっている南蛮屏風等「南蛮文化」と日本文化の関係等についても解説いただくなど、平安の昔から受け継がれる蒔絵工芸の素晴らしさ、美しさを通して、「訪日」への意欲を大いに盛り上げて頂く貴重な機会ともなりました。

先月号でも御紹介しました通り、2月25日にアナ・メンデス・ゴディーニョ観光担当副大臣を表敬訪問しました際に、私から「最近の両国首相の相互訪問を受け、観光分野も含め二国関係は多岐にわたり進展しており、特に、ここ数年、両国の観光客数は増大傾向にあり、3月2-6日に開催されるリスボン国際観光フェア(BTL)には「日本ブース」を出展予定であり、双方向の人的交流を更に活性化させていきたいと考えている」旨説明したのに対し、ゴディーニョ副大臣からも「日本人観光客を更に増加させたく、ワーキングホリデーや大学間の学術交流等によって若者の交流が促進されることが望ましい。スペインからポルトガルを管轄する旅行代理店は数多くあるが、今後は当地での旅行代理店の数を増やしていきたい」とのお話がありました。今回、リスボン国際観光フェアへの出展を通して、ポルトガル人の日本・日本文化に対する関心の高まり、「日本へ行きたい」という意欲の高まりを実感しました。また、私のところにも「日本への旅行を計画中であるが、訪問先等についてアドバイスを頂きたい」との要望が寄せられている他、BTLの期間中に若者から「日本に行きたい」との要望が寄せられたとも報告を受けており、これらの訪日のモメンタムを維持・促進し、両国間の観光交流をはじめとする人的交流の活発化に今後も微力を尽くしたいと考えており、皆様の御協力をお願いいたします。

〔ポルト市で開催された「椿展」〕

3月5日、ポルト市で第21回「椿展」が開催され、ポルト市長からの招待で、私も椿展の開会式に参加致しました。同開会式では、ポルト市長、ポルト市議会議長、文化担当副市長、ポルトガル椿協会会長等が出席。ポルト市長の挨拶の中で、椿と日本の関係の表れとして、日本大使が出席している旨の紹介がありました。

同開会式が行われたセラスヴェス美術館の大ホールには、約20台の大きな丸テーブルの上に丹精込めて育てられた椿がフラワーアレンジメントとして展示されており、ジャポニカ種の伝統的な「ヤブツバキ」の他に大輪の芙蓉に似た豪華な椿や山茶花に近い椿等が美しく飾られており、私もその椿の種類の多さに驚くとともに、椿を丹精込めて育てた方々の苦勞に思いを致しました。また、日本の菊まつりを連想し、花を丹精込めて育て愛でる日本とポルトガルの共通の文化を見た思いがしました。

そもそもポルトをはじめとするポルトガル北部地方では、椿のことを「ジャポネイラ」と呼ぶ習慣があるとのことで、椿は大航海時代に日本から齎されたとの言い伝えがあるそうです。特に、大航海時代以降、16世紀から18世紀に、ポルト、ガイヤ及び周辺の地域で、貴族の館、荘園領主の館等に椿を植えることが大流行したようで、当時、庭園に椿を植えることがステイタスシンボルであったとのことです。ポルト市長も実家の庭園に200本もの椿があると仰っていました。当時植えたと言われる椿が「ジャポニカ」種の「ヤブツバキ」です。小ぶりの椿ですが、赤が美しく凛とした美しさがあります。私も、前回のポルト市訪問の際に、400年前に日本から齎されたと言われる椿を某伯爵邸で見せて頂いたことがあるのですが、古木で威厳のある佇まいに400年前の日本との交流に思いを馳せ感銘致しました。この椿の古木が日本から来たものかどうか大学や研究機関等で鑑定することも検討されているとの事でした。このように、椿は、「ポルト市の象徴」とともに「ポルト地方と日本の友好の象徴」でもあるのです。

日本との関係ということで、この「椿展」の一環として、南蛮屏風と椿をテーマにした影絵パフォーマンス「NAMBAN-JIN」が上映され、私も鑑賞しました。この影絵パフォーマンスは、リスボン在住のアーティスト田中紅子氏によるもので、ポルトのソアレズドスレイス博物館所蔵の南蛮屏風の絵柄を基に、大航海時代に、ポルトガル人が日本に到着して交易する模様について物語にしたもので、鑑賞したポルトガル人に日本とポルトガルの歴史的な関係を身近なものとして感じて頂けたのではないかと思います。

また、椿展の会場では、ポルトガルと日本の子供達が描いた絵の交流展示が行われており、ポルト日本人補習校の生徒さんの作品も展示され、展示場におられた補習校の生徒さんや保護者の皆様にもお会いする機会ともなりました。

椿展出席後、ポルト副市長、ポルトガル椿協会会長他と今後椿に因んだ日本・ポルトガル間の交流強化のあり方について意見交換しました。その中で、16世紀から18世紀の間に貴族の館、荘園領主の館等の庭園に椿を植えることが大流行したことは上記のとおりですが、現在、ポートワインを始めとするワインを製造しているワイナリーが、これらの貴族の館、荘園領主の館の中にある例が多く、これらの歴史的建造物、荘園等をつないで、例えば、「ポルトワイン街道」「椿街道」というテーマで「旅」をアレンジしていきたいので日本の旅行関係業者等の協力を得たいとの要望がございました。これらの「旅」はポートワインとの関係が深い英国、北欧諸国の旅行者にも魅力的なものとなるとのことでした。

今回の椿展には、日本から日原行隆・日本椿協会役員も参加されました。同氏は、伊豆大島で、希少な日本産ヤブツバキの種のみを使用して非加熱精製椿油「生の椿油」を製造・販売する株式会社「椿」の社長でもあります。

同氏は、大航海時代に日本からポルトガルに渡った「ヤブツバキ」に因んで日本とポルトガルの友好関係促進のためここ数年にわたりポルトガルに来ておられ、本年も「椿展」に来訪されたとの事でした。

特に、本年は、2月26日に中国の大理で開催された「国際ツバキ協会総会伊豆大島の「都立大島公園」、「都立大島高校」、「椿花ガーデン」の3園が「国際優秀つばき園」の認定を頂いたとの事で、同氏は同大会に出席した後、ポルトの椿展に来られたとの事でした。

今後、2年に一度開催される「国際ツバキ協会総会」が、2020年には、日本の五島列島での開催がほぼ決まっており、同氏としては、同年が東京オリンピック開催の年にもあたることから、「国際ツバキ協会総会」の「プレ大会」もしくは「ポスト大会」を伊豆大島(東京都)で開催することを望んでいると話されていました。

いずれにしましても、「椿」をテーマとして、ポルトガルと日本の間の文化交流、観光交流ひいては経済交流の拡大の可能性があることを実感することができました。

3月は、9日にマルセロ・レベロ・デ・ソウザ新大統領の就任式が共和国議会で行われ、10日には、外交団に対する挨拶が行われました。また、16日には2016年度政府予算案が共和国議会で承認されました。このように、新政権は比較的順調な滑り出しを見せていますが、今後もポルトガルの内政、外交、経済政策等について引き続き注視するとともに、新政権下においても日本・ポルトガル二国間関係の拡大・強化、ポルトガル語圏諸国共同体 CPLP 諸国における両国の協力関係の拡大に努めたいと考えておりますので、皆様の御支援、御協力をお願い申し上げます。

今月号で御紹介できませんでした「北海道大学とアルガルヴェ大学の交流」、「白山市国際交流団のポルトガル来訪」、「ジョアン・パウロ・オリヴェイラ・イ・コスタ教授に対する叙勲伝達式」等についての私の所感、次号以降に順次御紹介いたしたく存じます。

4月に入り、日本では新年度を迎えましたが、皆様におかれましては、御自愛の上御活躍されますようお祈り申し上げます。